

**副反応検討部会で「寄り添った支援を継続している」「再開に差し支え無し」とされたことに対する被害者と家族の声** (2021年10月1日抗議会見より)

**■落合晴香さん（名古屋訴訟原告）**

私たちは8年間、ずっと元の体に戻してほしいと訴えてきました。しかし、未だに治療法はなく、訴えはじめてから何も変わっていません。

私にとっての8年間での一番の変化は、将来に向かっての不安がどんどん大きくなったということです。こんな変化を私は望んでいません。

協力医療機関体制の整備やリーフレットの見直しも議論に上がっていましたが、それは私たちの声を聴いた上で行われるのでしょうか。今一度私たちの声をしっかり聞いて下さるようお願いします。

**■望月瑠菜さん（東京訴訟原告）**

勧奨再開が議論されているのは、この先の未来で子宮頸がんが苦しむ女性やその家族の姿を想像してのことだと思いますが、私たちが今辛い思いをしている姿は思い浮かばないのでしょうか。本人だけでなく、我が子にワクチンを受けさせてしまったと自分を責める家族の辛さも想像してもらいたいです。

国に対し、私たち被害者にとって意味のある行動を求めていきたいです。

**■畑原清花さん（九州訴訟原告）**

勧奨再開を前提とした話ばかりで、私たちの声は届いていないんだとがっかりしました。

また、私たちを見ることなく、数値だけを見て判断されるんだと感じました。そして形だけの「寄り添った支援」で十分だと考えられていることも納得できません。

協力医療機関では、ワクチンは関係ないしできることは何もないと言われて返されただけです。これは寄り添うどころか突き放すような対応です。これでも寄り添った支援と言えるのでしょうか。

審議内容は現状からかけ離れています。接種から9年が経とうとするのに治療法もありません。

再開すると私たちと同じような被害者がでるだけです。8年前に戻るだけです。もうこれ以上被害を広げないで下さい。

## ■土岐梨奈さん（東京訴訟原告）

再開を検討しているって聞いて、私たちのことは数字として見ていて、そして消したい数字なんだなって思いました。被害者の私たちとしては疎外感を感じました。消される存在なのかなって。私は今妊娠中ですが、今後生まれてくる子どもにもワクチンを打たなきゃいけないってなったときに、子どもが副反応になったときに、またこういうふうになかったことにされるんじゃないかって、不安が募ります。

うまくまとめられませんが、議論を見ていると、今までの私たちの苦労ってなんだったのかなってというのが、一番の感想です。

## ■平原沙奈さん（東京訴訟原告）

再開と聞くと、私たちの声はやっぱり聞こえていないんだなってというのが第一の思いです。毎日苦しんでいる、そこをしっかりとちゃんと見た上で検討してほしいなって感じます。

## ■東京原告 5 番

今ベッドの上から話しています。今日体調が悪くて、身支度ができなかったのも、カメラオフで参加しました。このように、倦怠感、疲れやすさが続いています。家事、洗濯なども、みな家族に頼っています。

このような生活が 9 年間続いています。来年で 10 年ですが、まだ治療法は確立されていません。

今年から少しずつ在宅で出来る仕事を始めましたが、それも体調に左右され、今週はほとんど出来ませんでした。こんな状態なので、会社に所属して働くことは到底できません。

私の願いはひとつだけです。積極的勧奨の再開の前に、どうか治療法を開発してください。これはずっと変わらない願いです。

書類の上では行政による支援が行き届いているのかもしれませんが、残念ながら私にその実感はありません。体が重くてずっと鉛を背負っているような感覚から早く解放されたいです。

## ■東京原告 15 番

現在 20 歳です。YouTube で傍聴しましたが、厚労省や検討部会の先生たちの目には、HPV ワクチン接種後に苦しんでいる被害者の姿は映っていないなと思いました。検討部会では 8 年前よりもいろんなものが整ってってきた、副反応の懸念がなくなってきたとはっきり言っていました、ありえません。

協力医療機関はほとんど機能していません。私は協力医療機関に 7 年継続して受診しています。「きみは子どもだし単純だからすぐ治るよ」と言われて 7 年です。全く治っていません。

都道府県の相談窓口にも、相談にこたえられる人はいません。高校入学時と卒業時に相談しましたが、何の回答も得ることができませんでした。

これが安心して接種できる体制で、被害者に寄り添った支援と言えるのでしょうか。何ひとつ解決なんてしていません。8 年間全く変わらない毎日を死んだように生きています。まずは私たちの被害を正しく理解して向き合うべきだと思います。

## ■九州訴訟原告 10 番

21 歳です。全身の筋緊張で右足には麻痺があり、熱いお湯をかけられても誰か触ってもわかりません。歩行はできませんし、痛みがずっと続いています。右側の視界はほとんどなく、前髪がかかっても気がつかないことが多いです。誰かの支えがないと 1 人では行動できません。

「寄り添った支援が充実しているから再開してもよい」という検討部会の話聞いて、憤りを感じました。これまでも見捨てられてきましたが、本当に見捨てられたんだなと思いました。

協力医療機関は 3 カ所受診しましたが、1 カ所目はとりあってもらえず、2 カ所目は詐病扱いされました。やっと 3 カ所目、片道 8 時間かかる医療機関で治療を受けることができましたが、今はコロナの問題で受け入れが停止されています。十分な治療を受けることがそもそも困難な状況です。

PMDA の補償は判定不能ということで不支給となりました。地元の自治体の支援も受けられません。これが現実です。これが何にも変わっていません。

この現実を知ってください。そして、この現実を知らない打つ世代の人に、どうか知らせてください。

## ■九州訴訟原告

中 2 で接種してから 10 年が経ちました。25 回の入院をしましたが、今もベッド上の生活ばかりです。

議論を拝見しましたが、副反応検討部会という名前なのに、推奨が前提であり、副反応のことが述べられていません。さらに私たちのことを心因性のものであり副反応でないような言い方をしています。

協力医療機関が 84 もあると言いますが、わたしはそこでまともな対応を受けたことはありません。

副反応の救済もちゃんと行われているといわれていましたが、まともな救済されていません。

研究機関もたくさんあるのに都合のよいものだけとりあげています。

私たちのことを見捨てないでほしいと、とても思っています。この問題について私たちのことをちゃんと見てくれるといいなとすごく思います。

## ■梅本邦子さん（九州原告梅本美有さんの母）

今日の議論で、始めから終わりまで再開が前提とされている内容にとっても驚きました。副反応の症状は接種時の痛みとか心理的なものとして片付けられてしまっており、危険性についてしっかり検討すべきなのではないかとおっしゃる方が 1 人もいませんでしたし、そういう姿勢はみじんも感じられませんでした。

うちの娘は8年前に接種してからずっと副反応の症状に苦しめられています。その苦しみを分かっている家族として勧奨を再開するというのはどうしても許すことはできません。

副反応についてもっと深く議論して検討していただいて、再開の議論はそれからなんじゃないかなと思いました。

## ■東京原告 34 番母

実際に病院に行っても治療法がないので、何も対応されません。このまま再開されても、何も被害は変わりません。どうかこの先も、接種を受けるお子さんたちが同じ症状に苦しまないように、本当にきちんと考えてほしいです。